Ⅰ　男女の地位の平等

1　男女平等についての現在の状況（問1　19ページ）

―男女の地位が「平等である」分野は、男女とも「学校教育の場」と考える人が最も多い―

全体では「平等である」と考える人が、“(d)学校教育の場”（48.4%）、“(a)家庭の中”（31.5%）、“(f)法律や制度の上”（30.1%）、“(c)地域活動の中”（27.3%）の順に多くなっている。「平等である」と考える人が最も少ないのは“政治の場”（9.5%）である。

女性では、“(e) 政治の場”（5.8%）、“(g) 社会全体”（8.9%）で、「平等である」が 1 割未満になっており、また、すべての項目で男性よりも「平等である」と考える人が少なくなっている。

男性では、“(e) 政治の場”（14.5%）、“(g) 社会全体”（15.4%）では 1 割台となっているが、すべての項目で女性よりも、「平等である」と考える人が多くなっている。特に差が大きいのは“(f)法律や制度の上”（40.8%）で、女性を 18.7 ポイント上回っている。

Ⅱ　家庭生活

1　家庭における役割（問2　36ページ）

―家庭の中で「妻の役割」である仕事は、男女とも「食事の支度」と考える人が最も多い―

家庭の仕事は誰の役割だと思うかについて、『妻の役割』と回答した割合が多いのは、“(b)食事の支度”（女性 79.1%、男性 82.1%）、次いで“(d)洗濯”（女性 73.3%、男性 73.1%）、“(g)日常の買い物”（女性 68.2%、男性 64.8%）の順となった。

「夫婦同じ程度の役割」の割合が高いのは、“(h)高額商品の購入の決定”（女性 48.5%、男性 41.4%）、“(j)育児・しつけ”（女性 39.6%、男性 42.1%）、“(k)PTA や地域活動への参加”（女性 38.5%、男性 32.5%）の順となっている。

2　「男は仕事、女は家庭」という考え方（問3　60ページ）

―全体では、反対派が上回る。女性では反対派が上回り、男性では反対派と賛成派が拮抗―

全体では、「賛成」（7.2%）、「やや賛成」（18.4%）で、これらを合わせて『賛成である（計）』は 25.6%となっている。一方、「あまり賛成しない」（20.9%）、「賛成しない」（17.5%）を合わせた『賛成しない（計）』は 38.4%となり『賛成しない（計）』が『賛成である（計）』を 12.8 ポイント上回っている。「どちらともいえない」は 32.3%となっている。

女性では、『賛成である（計）』は 21.1%、『賛成しない（計）』は 45.3%となり、『賛成しない（計）』が『賛成である（計）』を 24.2 ポイント上回った。

男性では、『賛成である（計）』は 31.6%、『賛成しない（計）』は 29.1%となり、『賛成である（計）』が『賛成しない（計）』を 2.5 ポイント上回っている。

3　子どもの教育方針（問4　65ページ）

―女の子には「思いやり」「気配り」を、男の子には「思いやり」「責任感」―

女の子の場合と男の子の場合を比較すると、女の子に対しては、女性・男性とも「思いやりがある子」が最も多く、7 割を超えている。次いで「気配りができる子」が 5 割以上、「誰にでも好かれる子」が 3 割以上となっている。

男の子に対しては、女性では、「思いやりがある子」、「責任感の強い子」、「活発で行動力がある子」の順に多く、いずれも 4 割以上となっている。男性では、「責任感の強い子」が 5 割以上となり、次いで「活発で行動力がある子」、「思いやりがある子」が 4 割以上となっている。

4　自分の介護を誰に望むか（問5　70ページ）

―女性は「施設（専門的な看護、介護を受ける）」に、男性は「配偶者」に、が最多―

全体では「配偶者」が34.7%と最も多く、次いで「施設（専門的な看護、介護を受ける）」(30.4%)、「公的サービス」(12.8%)、「子ども」(9.4%) となっている。

女性では「施設」(35.3%) が最も多く、次いで「配偶者」(23.4%)、「公的サービス」(15.7%)、「子ども」(13.1%) となっている。

男性では、「配偶者」(50.0%) が半数を占め、次いで「施設」(23.7%)、「公的サービス」(8.8%)、「子ども」(4.5%) となっている。

5　男性が家事、子育て、介護、地域活動に参加していくために必要なこと（問6　73ページ）

―男女とも、「夫婦や家族間でのコミュニケーションをよくはかること」が最多―

全体では、「夫婦や家族間でのコミュニケーションをよくはかること」(58.0%)が最も多く、次いで「男性が家事などに参加することに対する男性自身の抵抗感をなくすこと」(51.0%)、「社会の中で、男性による家事、子育て、介護、地域活動についてもその評価を高めること」(44.0%)、「労働時間短縮や休暇制度を利用し、仕事以外の時間をより多く持てるようにすること」(41.1%) が続いている。

男女の比率の差は「男性が家事などに参加することに対する男性自身の抵抗感をなくすこと」が最も大きく、女性の方が17.1ポイント多くなっている。

Ⅲ　結婚観

1　結婚観について（問7　77ページ）

―女性は「結婚する、しないは個人の自由」、男性は「家庭を持ち子どもをもつことは自然のこと」が最多―

女性では、「結婚する、しないは個人の自由である」(40.2%) が最も多く、次いで「家庭を持ち、子どもをもつことは自然のことである」(31.8%)、「精神的にも経済的にも安定する」(15.7%) の順となった。

男性では、「家庭を持ち子どもをもつことは自然のことである」(46.4%)、次いで「結婚する、しないは個人の自由である」(20.9%)、「精神的にも経済的にも安定する」(20.7%) の順となった。

結婚に対しては、男性の方が肯定的に考える人が多く、女性の方が結婚にとらわれていない傾向が見られる。

2　離婚観について―「(a)相手に満足できないときは離婚すればよい」（問8（a）　80ページ）

―男女ともに否定派が多数―

女性では、「そう思う」(10.0%)、「どちらかといえばそう思う」(26.3%)、を合わせた『そう思う(計)』が36.3%となった。「そうは思わない」(30.5%)と「どちらかといえばそう思わない」(19.2%)を合わせた『そう思わない（計)』は49.7%となり、『そう思う（計)』より13.4ポイント多くなっている。

男性では、「そう思う」(11.5%)、「どちらかと言えばそう思う」(17.9%)、を合わせた「そうおもう(計)』が29.3%となった。「そうは思わない」(32.5%) と「どちらかといえばそう思わない」(24.8%)を合わせた『そう思わない（計)』は57.3%となり、『そう思う（計)』より28ポイント多くなっている。

『そう思う（計)』では女性が男性を7ポイント上回り、『そう思わない（計)』では男性が女性より7.6ポイント多くなっている。

3　離婚観について—「(b)今の社会では離婚すると女性の方が不利」(問8 (b)　84ページ)

—男女ともに肯定派が多数、女性は半数以上が肯定派—

女性では、『そう思う（計)』が56.5%、『そう思わない（計)』は30.9%となり、『そう思う（計)』が25.6ポイント多くなっている。

男性では、『そう思う（計)』が46.8%、『そう思わない（計)』は39.5%となり、『そう思う（計)』が7.3ポイント多くなっている。

『そう思う（計)』では女性の方が9.7ポイント多く、『そう思わない』では男性の方が8.6ポイント多くなっている。

Ⅳ　職業

1　職場での男女平等について（問9　88ページ)

—男女ともに「平等である」は「教育や研修制度」で最も多く、「昇進・昇格」で最も少ない—

男女とも「平等である」と回答した人が最も多いのは、“(d) 教育や研修制度は”（女性58.5%、男性57.8%）で、次いで“(a) 募集や採用の条件では”（女性42.4%、男性42.5%）となっている。

一方、最も少ないのは、“(b) 昇進・昇格は”（女性27.7%、男性29.6%）で、次いで“(c) 人事配置は”（女性32.7%、男性31.3%）となっている。

『男性が優遇されている』については、男女とも“(b) 昇進・昇格は”（女性53.5%、男性49.0%）が最も多く、次いで“(c) 人事配置は”（女性42.9%、男性42.5%）となっている。

『女性が優遇されている』については、男女とも“(f) 仕事の内容は”（女性10.9%、男性14.0%）が最も多く、女性では“(a) 募集や採用の条件では”が、男性では“(g) 全体的には”が続いている。

2　女性が管理職に昇進することについて（問10　91ページ)

—男女ともに賛成派が過半数—

男女とも『賛成である（計)』（女性74.4%、男性64.6%）が『賛成しない（計)』（女性4.9%、男性9.4%）を上回っている。

『賛成である（計)』は女性の方が男性より9.8ポイント多く、『賛成しない（計)』は男性の方が女性より4.5ポイント多くなっている。

3　女性が管理職に昇進することのイメージ—「(a)女性が昇進することについての一般的なイメージ」—（問11(a)　93ページ)

—男女とも「能力が認められた結果である」が最多—

男女とも「能力が認められた結果である」が最も多く、次いで「責任が重くなる」が多くなっている。

男女差は「責任が重くなる」（18.5ポイント）が最も大きく、女性の方が多くなっている。

女性が管理職に昇進することのイメージ—「(b)あなた自身が昇進することについてのイメージ」—（問11(b)　96ページ)

—男女とも「責任が重くなる」が最多—

男女とも、「責任が重くなる」（女性71.4%、男性70.4%）が最も多く、次いで「能力が認められた結果である」（女性56.2%、男性53.8%）となっている。

「仕事と家庭の両立が困難になる」は女性の方が男性より36.9ポイント多くなっている。

4　女性のリーダーを増やす上での障害（問 12　98 ページ）

―男女とも「保育・介護・家事などにおける家族の支援が十分ではないこと」が最多―

男女とも、「保育・介護・家事などにおける家族の支援が十分ではないこと」（女性 61.8%、男性 44.9%）が最も多く、「長時間労働の改善が十分ではないこと」（女性 51.4%、男性 37.7%）、「保育・介護の支援などの公的サービスが十分ではないこと」（女性 49.1%、男性 34.3%）、「上司・同僚・部下となる男性や顧客が女性リーダーを希望しないこと」（女性 43.8%、男性 27.5%）、「企業などにおいては、管理職になると広域異動が増えること」（女性 28.8%、男性 25.5%）が続く。

「女性自身がリーダーとなることを希望しないこと」（女性 17.1%、男性 23.4%）と「現時点では、必要な知識や経験などを持つ女性が少ないこと」（女性 16.4%、男性 21.6%）では男性の方が多くなっている。

5　女性が働き続ける上での障害（問13　101ページ）

―男女とも「保育・介護・家事などにおける家族の支援が十分ではないこと」が最多―

男女とも、「保育・介護・家事などにおける家族の支援が十分ではない」（女性 61.6%、男性 52.6%）が最も多く、次いで「結婚や出産の際退職しなければならない慣行が今でも残っている」（女性 44.4%、男性 42.9%）となっている。

男女差は「保育・介護・家事などにおける家族の支援が十分ではない」（女性 61.6%、男性 52.6%）で最も大きく、女性の方が 9 ポイント多くなっている。

「女性の能力が正当に評価されない」（女性 23.1%、男性 24.1%）と「特に障害はない」（女性 5.4%、男性 8.1%）では男性の方が多くなっている。

6　女性の再就職に必要なこと（問14　104ページ）

―男女とも「保育体制を充実する」が最多―

男女ともに「保育体制を充実する」（女性 56.9%、男性 60.2%）が最も多くなっている。

女性では「パートタイマーの労働条件を向上させる」（48.8%）、「退職時と同一企業に再雇用されるようにする」（38.9%）が続いている。

男性では、「退職時と同一企業に再雇用されるようにする」（49.4%）、「パートタイマーの労働条件を向上させる」（37.4%）が続いている。

7　男女が共に仕事と家庭を両立していくために必要なこと（問15　107ページ）

―男女とも「男女とも育児・介護休業制度を取得しやすくする職場環境づくり」が最多―

男女とも「男女とも育児・介護休業制度を取得しやすくする職場環境づくり」（女性 60.1%、男性 59.6%）が最も多く、続いて「保育施設（職場内保育所を含む）や保育時間の延長など保育サービスの充実」（女性 45.1%、男性 47.4%）、「パートタイマーの給与・労働条件の改善」（女性 32.1%、男性 24.4%）、「育児などによる退職者の再雇用制度の普及」（女性 23.8%、男性 23.7%）の順となっている。

男女で比較すると、「パートタイマーの給与・労働条件の改善」は 7.7 ポイント、「ホームヘルパー制度など介護サービスの充実」は 3.7 ポイント女性の方が多く、「労働時間の短縮」は 5.7 ポイント、「保育施設（職場内保育所を含む）や保育時間の延長など保育サービスの充実」は 2.3 ポイント男性の方が多くなっている。

V　社会的な活動

1　社会的な活動への参加の状況と今後の活動意向―「(a)現在活動しているもの」―（問16(a) 111ページ）

―男女とも「自治会や町内会」、「趣味や教養、スポーツ等グループ活動」が多い―

男女とも、現在活動している社会活動は、「自治会や町内会（老人クラブや婦人会などを含む）」（女性22.5%、男性35.5%）、「趣味や教養、スポーツ等グループ活動」（女性22.4%、男性24.4%）、「ＰＴＡ・青少年・子ども会等の世話」（女性13.9%、男性8.8%）」が多くなっている。

加えて男性では、「防災活動や災害援助活動」（7.7%）があった。

社会的な活動への参加の状況と今後の活動意向―「(b)今後活動してみたいもの」―（問16(b) 115ページ）

―男女とも「趣味や教養、スポーツ等グループ活動」が最多―

男女とも、今後活動してみたい社会活動は、「趣味や教養、スポーツ等グループ活動」（女性31.4%、男性26.9%）が多くなっている。次いで「地球環境を守るための活動（自然保護、リサイクル活動など）」（女性9.7%、男性10.0%）、「自治会や町内会（老人クラブや婦人会などを含む）」（女性7.2%、男性11.1%）が続いている。

加えて、女性では「国際交流活動（通訳やホームステイの受入など）」（7.9%）が男性よりも3.2ポイント多く、男性では「都市計画、まちづくりなどの市民活動」（7.1%）で2.8ポイント、「防災活動や災害援助活動」（6.8%）で3.5ポイント女性よりも多かった。

2　社会的な活動に参加していない理由（問17　119ページ）

―男女とも「仕事が忙しく、時間がない」が最も多い―

男女ともに、「仕事が忙しく、時間がない」（女性30.4%、男性34.6%）が最も多かった。

女性では、次いで「家事、育児、介護が忙しく、時間がない」（24.3%）、「人間関係がわずらわしい」（23.1%）、「関心がない」（16.1%）が多かった。

男性では、次いで「人間関係がわずらわしい」と「関心がない」がともに24.4%と多かった。

また、男女ともに「自分のやりたい活動をしているグループや団体を知らない」（女性14.9%、男性19.0%）も多かった。

3　指導的立場に女性が少ない理由（問18　120ページ）

―男女とも「女性自身が指導的な立場に就くことに対して消極的だから」が最多―

男女ともに「女性自身が指導的な立場に就くことに対して消極的だから」（女性46.0%、男性48.5%）が最も多かった。

女性では、次いで「女性が指導的立場に就くことが、世間一般から快く思われないから」（35.6%）、「女性が能力や個性を発揮できる環境整備や条件が不十分だから」（26.7%）、「家族や周囲の協力が得られないから」（23.1%）と続く。

男性では、次いで「家族や周囲の協力が得られないから」（32.0%）、「女性が指導的立場に就くことが、世間一般から快く思われないから」（25.6%）、「女性が能力や個性を発揮できる環境整備や条件が不十分だから」（24.6%）と続く。

Ⅵ　女性の人権

1　女性の人権が尊重されていないと思うこと（問19　123ページ）

―女性は「職場や地域でのセクハラ」、男性は「配偶者や交際相手からの暴力」が多い―

女性では、「職場や地域におけるセクシュアル・ハラスメント」(52.3%) が最も多く、次いで「配偶者（事実婚や別居中の夫婦、元配偶者を含む）や交際相手からの身体的、精神的、性的暴力」(47.8%)、「売買春（援助交際を含む）」(30.2%)、「女性のヌード写真などを掲載した雑誌等」(19.7%) の順となった。

男性では、「配偶者や交際相手からの身体的、精神的、性的暴力」(39.3%) が最も多く、次いで「職場や地域におけるセクシュアル・ハラスメント」(37.4%)、「特にない」(27.3%)、「売買春」(21.2%) の順となった。

男女の比較では、「女性の容ぼうを競うミス・コンテスト」と「特にない」を除く全ての項目で女性の割合が男性を上回っている。「職場や地域におけるセクシュアル・ハラスメント」で女性の方が 14.9 ポイントと最も多くなっている。

2　メディアにおける性・暴力表現（問20　126ページ）

―「そのような表現を望まない人や子どもの目に触れないようにする気配りが足りない」が最多―

男女とも「そのような表現を望まない人や子どもの目に触れないようにする配慮が足りない」(女性 54.2%、男性 43.8%) が最も多く、次いで「社会全体の性に対する道徳観・倫理観が損なわれている」(女性 41.7%、男性 39.7%) となった。

女性では、次いで「女性に対する犯罪を助長するおそれがある」(33.2%)、「女性の性的側面を過度に強調するなど、行き過ぎた表現が目立つ」(32.8%)、「女性のイメージや男性のイメージについて偏った表現をしている」(17.7%) と続く。

男性では、次いで「女性の性的側面を過度に強調するなど、行き過ぎた表現が目立つ」(38.7%)、「女性に対する犯罪を助長するおそれがある」(32.9%)、「女性のイメージや男性のイメージについて偏った表現をしている」(18.6%) の順になった。

「そのような表現を望まない人や子どもの目に触れないようにする配慮が足りない」では女性の方が 10.4 ポイント多く、「女性の性的側面を過度に強調するなど、行き過ぎた表現が目立つ」では男性の方が 5.9 ポイント多くなった。

3　配偶者や交際相手などからの暴力と認識される行為（問21　129ページ）

―「なぐったり、けったり、物を投げつけたりする」「刃物などを突きつけて、おどす」が9割超―

「暴力にあたる」と思うと答えた人が多い順に見ていくと、“(c) なぐったり、けったり、物を投げつけたりする”（女性 92.9%、男性 91.7%）が最も多く、次いで“(b) 刃物などを突きつけて、おどす”（女性 92.8%、男性 91.5%）、“(a) 骨折や打ち身、切り傷などのケガをさせる”（女性 89.3%、男性 91.2%）が 9 割前後となっており、続いて“(m) いやがっているのに、性的な行為を強要する”（女性 83.7%、男性 79.1%）、“(d) 壁にものを投げたり、なぐるふりをしておどす”（女性 73.0%、男性 69.2%）、“(k) 職場に行くことを妨害したり、外出先を制限する”（女性 71.3%、男性 65.4%）、“(i)「誰のおかげで生活できる」とか「かいしょうなし」などと言う”（女性 70.0%、男性 57.3%）、“(j) 家計に必要な生活費を渡さない”（女性 68.0%、男性 59.8%）、“(l) 家族や友人との関わりを持たせない”（女性 66.5%、男性 57.3%）、“(n) 避妊に協力しない”（女性 66.8%、男性 55.6%）の順となった。

“(f) 他の異性との会話を許さない”、“(g) 何を言っても長時間無視し続ける”は、「暴力に

あたる」と思う人の割合は少なくなっている。

男女を比較すると、“（e）大声でどなる”、“（h）交友関係や行き先、電話、メールなどを細かく監視する”は、女性の方が「暴力にあたる」と思う人の割合が多い。

4　配偶者からのこれまでの被害経験の有無　（問22　145ページ）

―男女とも「身体的暴行」で最も比率が高い―

“（a）身体的暴行”では、「何度もあった」（女性 4.5%、男性 1.8%）、「1、2 度あった」（女性 18.3%、男性 14.3%）となり、その合計では女性が男性を 6.7 ポイント上回っている。

“（b）心理的攻撃”では、「何度もあった」は女性（7.8%）が男性（2.5%）を 5.3 ポイント上回り、「1、2 度あった」（女性 12.4%、男性 12.2%）では、あまり差は見られない。

“（c）経済的圧迫”では、「何度もあった」（女性 4.9%、男性 0.7%）、「1、2 度あった」（女性 6.1%、男性 3.2%）となり、その合計では女性が男性を 7.1 ポイント上回った。

“（d）性的強要”では、「何度もあった」（女性 4.3%、男性 0.5%）、「1、2 度あった」（女性 8.0%、男性 3.2%）で、その合計では女性が男性を 8.6 ポイント上回った。

全ての項目で「何度もあった」と「1、2 度あった」は女性の方が男性を上回っている。

5　配偶者からのこの1年間の被害経験の有無　（問22　152ページ）

―女性では「心理的攻撃」で、男性では「経済的圧迫」で最も比率が高い―

※「経済的圧迫」「性的強要」の男性については、サンプル数が少ないため参考掲載とする。

“（a）身体的暴行”では、「何度もあった」は女性 2.8%、男性 2.8%と同じであったが、「1、2 度あった」は女性で 13.3%、男性で 18.3%となった。

“（b）心理的攻撃”では、「何度もあった」は女性で 13.4%、男性で 9.2%、「1、2 度あった」は女性で 26.8%、男性で 23.1%となった。

“（c）経済的圧迫”では、「何度もあった」は女性で 14.5%、男性で 5.9%、「1、2 度あった」は女性で 18.8%、男性で 35.3%となった。

“（d）性的強要”では、「何度もあった」は女性で3.9%、男性で6.3%、「1、2度あった」は女性で 10.4%、男性で12.5%となった。

6　配偶者からの暴力についての相談経験の有無（問22-1　157ページ）

―「どこ（だれ）にも相談しなかった」は、女性39.6%、男性57.9%―

配偶者から被害を受けたことが「これまでにあった」と答えた人に、どこ（だれ）かに打ち明けたり、相談したことがあるかをたずねたところ、「相談した」と答えた人は 39.5%、「相談しなかった」は 45.6%で、「相談しなかった」の方が 6.1 ポイント多かった。

相談した人のうち、どこ（だれ）に相談したかを見ると、男女ともに「知人、友人」（女性 32.0%、男性 13.1%）と、「家族や親戚」（女性 25.7%、男性 12.1%）が多くなっており、その他は 2%未満となっている。

性別で見ると、男性の方が「どこ（だれ）にも相談しなかった」（57.9%）が 5 割を超え、女性（39.6%）より 18.3 ポイント多くなっている。

7　配偶者からの暴力について相談しなかった理由（問22-2　160ページ）

―男女ともに「相談するほどのことではないと思った」が最多―

配偶者から被害を受けながら「相談しなかった」と答えた人に、その理由をたずねたところ、男女ともに、最も多かったのが「相談するほどのことではないと思ったから」（女性 48.9%、男性

67.7%)、次いで「自分にも悪いところがあると思ったから」(女性 33.0%、男性 32.3%)、「相談しても無駄だと思った」(女性 30.7%、男性 16.1%) が続く。

男女の違いで特徴的なのは、「相談するほどのことではないと思ったから」では女性よりも男性の方が 18.8 ポイント多く、「相談しても無駄だと思ったから」では女性の方が 14.6 ポイント多くなっている。他にも男性よりも女性の方が特に高い項目として「恥ずかしくてだれにもいえなかったから」(12.2 ポイント)、「そのことについて思い出したくなかったから」(9.1 ポイント) がある。

8　交際相手からの被害経験の有無　(問23　161ページ)

—男女とも「心理的攻撃」で最も比率が高い—

“(a) 身体的暴行”では、「10～20 歳代にあった」(女性 4.6%、男性 2.3%)、「30 歳代以上にあった」(女性 1.4%、男性 0.4%) となり、その合計では女性が男性を 3.3 ポイント上回っている。

“(b) 心理的攻撃”では、「10～20 歳代にあった」(女性 4.9%、男性 2.3%)、「30 歳代以上にあった」(女性 1.8%、男性 0.9%) で、その合計では女性が男性を 3.5 ポイント上回っている。

“(c) 経済的圧迫”では、「10～20 歳代にあった」(女性 1.9%、男性 0.4%)、「30 歳代以上にあった」(女性 1.1%、男性 0.8%) となり、その合計では女性が男性を 1.8 ポイント上回った。

“(d) 性的強要”では、「10～20 歳代にあった」(女性 4.2%、男性 0.6%)、「30 歳代以上にあった」(女性 1.3%、男性 0.4%) で、その合計では女性が男性を 4.5 ポイント上回った。

全ての項目で、「10～20 歳代にあった」と「30 歳代以上にあった」のいずれにおいても、女性の方が男性より多くなっている。

9　同居の際の交際相手からの被害経験の有無　(問23　168ページ)

—女性では「身体的暴行」で、男性では「心理的攻撃」で最も比率が高い—

“(a) 身体的暴行”では、「10～20 歳代にあった」(女性 15.8%、男性 12.2%)、「30 歳代以上にあった」(女性 9.2%、男性 4.9%) となり、その合計では女性が男性を 7.9 ポイント上回っている。

“(b) 心理的攻撃”では、「10～20 歳代にあった」は女性 (14.5%) が男性 (14.6%)、「30 歳代以上にあった」(女性 7.9%、男性 7.3%) で、男女の差は見られない。

“(c) 経済的圧迫”では、「10～20 歳代にあった」(女性 10.5%、男性 4.9%)、「30 歳代以上にあった」(女性 5.3%、男性 2.4%) となり、その合計では女性が男性を 8.5 ポイント上回った。

“(d) 性的強要”では、「10～20 歳代にあった」(女性 15.8%、男性 4.9%)、「30 歳代以上にあった」(女性 3.9%、男性 2.4%) で、その合計では女性が男性を 12.4 ポイント上回った。

“(b) 心理的攻撃”を除く全ての項目で、「10～20 歳代にあった」と「30 歳代以上にあった」は女性の方が男性よりも多くなっている。

１０　交際相手からの暴力を受けたときの行動 (問23-1　174ページ)

—女性では「別れたい (別れよう) と思ったが、別れなかった」が最多—

女性では、「別れたい (別れよう) と思ったが、別れなかった」(40.8%) と最も多く、次いで「相手と別れた」(35.5%)、「別れたい (別れよう) とは思わなかった」(18.4%) となった。

男性では、「相手と別れた」(33.3%) と「別れたい (別れよう) とは思わなかった」(33.3%) が同率で、「別れたい (別れよう) と思ったが、別れなかった」(29.6%) は、女性よりも 11.2 ポイント少なくかった。

１１　交際相手と別れなかった理由（問23-2　176ページ）

―男女とも「相手が変わってくれるかもしれないと思ったから」が最多―

※男性についてはサンプル数が少ないため参考掲載とする。

女性では、「相手が変わってくれるかもしれないと思ったから」(48.4%) が最も多く、次いで「相手が別れることに同意しなかったから」(22.6%) と「相手の仕返しが怖かったから（もっとひどい暴力や、性的な画像のばらまきなど)」(22.6%) が同率で続いている。

男性では、「相手が変わってくれるかもしれないと思ったから」(37.5%) と「周囲の人から、別れることに反対されたから」(37.5%) が同率で最も多い。次いで「相手が別れることに同意しなかったから」(25.0%) と「世間体が悪いと思ったから」(25.0%) と「相手には自分が必要だと思ったから」(25.0%) が同率で続いている。

１２　交際相手からの暴力についての相談経験の有無（問23-3　179ページ）

―「どこ（だれ）にも相談しなかった」は、女性39.5%、男性63.0%―

「相談した」人は 54.4%、「相談しなかった」人は 45.6%となっている。

相談先では、男女とも「知人、友人」(女性 38.2%、男性 18.5%) が最も多く、次いで「家族や親戚」(女性 13.2%、男性 7.4%)、「警察」(女性 2.6%、男性 3.7%) と続く。

また、女性では「民間支援団体」(1.3%)、男性では「市役所、町役場」「法テラス・弁護士会」がともに 3.7%であった。

「どこ（だれ）にも相談しなかった」(女性 39.5%、男性 63.0%) では、男性の方が 23.5 ポイント多い。

１３　交際相手からの暴力について相談しなかった理由（問23-4　181ページ）

―男女とも「相談するほどのことではないと思ったから」が最多―

※男性については、サンプル数が少ないため参考掲載とする。

交際相手から被害を受けながら「相談しなかった」と答えた人に、その理由をたずねたところ、男女ともに、最も多かったのが「相談するほどのことではないと思ったから」(女性 40.0%、男性 52.9%) だった。

女性では、次いで「相談しても無駄だと思ったから」(30.0%)、「恥ずかしくてだれにも言えなかったから」(30.0%) が続く。

男性では、次いで「相談しても無駄だと思ったから」「自分にも悪いところがあると思ったから」「自分さえ我慢すれば、なんとかこのままやっていけると思ったから」が 29.4%で並ぶ。

女性の方が男性より多くなったのは、「恥ずかしくてだれにも言えなかったから」、「どこ（だれ）に相談してよいのかわからなかったから」、「相手の仕返しが怖かったから（もっとひどい暴力や、性的な画像のばらまきなど」、「そのことについて思い出したくなかったから」などがある。

男性の方が女性より多くなったのは、「相談するほどのことではないと思った」、「自分にも悪いところがあると思ったから」、「自分さえ我慢すれば、なんとかこのままやっていけると思ったから」、「自分が受けている行為がＤＶ（交際相手からの暴力）とは認識していなかったから」であった。

１４　相談機関・関係者の周知状況（問24　183ページ）

―男女とも「警察」が最も多い―

男女とも最も多かったのは「警察」(女性 74.3%、男性 77.8%) であった。

次いで、女性では「石川県女性相談支援センター（配偶者暴力相談支援センター)」(27.5%)、「市役所、町役場」(22.5%)、「女性センター」(21.0%) の順となっている。

男性では、「市役所、町役場」(28.8%)、「石川県女性相談支援センター（配偶者暴力相談支援センター)」(23.9%)、「法テラス・弁護士会」(21.4%) の順となっている。

１５　男女間における暴力をなくすために必要なこと（問25　187ページ）

—女性は「身近な相談窓口を増やす」、男性は「家庭での暴力防止のための教育」—

女性では、「被害者が早期に相談できるよう、身近な相談窓口を増やす」(59.8%) が最も多く、次いで「家庭で保護者が子どもに対し、暴力を防止するための教育を行う」(56.3%)、「学校・大学で、生徒・学生に対し、暴力を防止するための教育を行う」(51.9%) の順となった。

男性では、「家庭で保護者が子どもに対し、暴力を防止するための教育を行う」(57.9%)、次いで、「被害者が早期に相談できるよう、身近な相談窓口を増やす」(49.6%)「加害者への罰則を強化する」(48.3%) の順だった。

Ⅶ　男女共同参画社会の実現に向けて

１　用語の周知度（問26　191ページ）

—「ＤＶ」と「男女雇用機会均等法」が、男女ともに8割を超える—

全体では、“(g)ＤＶ(配偶者や交際相手からの暴力)”が最も周知度が高く（女性86.5%、男性85.7%)、次いで“(i)男女雇用機会均等法”（女性84.6%、男性84.0%）となっており、ともに8割を超えている。

続いて、“(a)男女共同参画社会”（女性61.3%、男性68.6%）で6割を超え、“(h)仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス)”（女性52.3%、男性52.4%）は5割を超えている。

２　男女共同参画社会の実現に向けて必要なこと（問27　213ページ）

—男女とも「男女とも生活的自立をする（身の回りのことは自分でする）こと」が最多—

男女とも、最も多かったのは「男女とも生活的自立をする（身の回りのことは自分でする）こと」（女性 48.7%、男性 44.5%)、次いで「家事や育児、介護などを家族で分担すること」(女性 44.6%、男性 39.7%)、「子どもの時から平等意識を育てるしつけ、教育をすること」(女性 33.8%、男性 24.6%) の順となった。

男女の差が大きかったのは「子どもの時から平等意識を育てるしつけ、教育をすること」で、女性が男性よりも 9.2 ポイント多くなった。

３　男女共同参画社会の実現のために行政に対して望むこと（問28　217ページ）

—男女とも「育児休業、介護休業などの制度やサービスなどを整備する」が最多—

男女とも、最も多かったのは「育児休業、介護休業などの制度やサービスなどを整備する」（女性 53.5%、男性 44.9%)、次いで「仕事と家庭の両立が容易になるような就業環境の整備（超過勤務の短縮、フレックスタイムなど)」（女性 49.5%、男性 40.8%）となっており、いずれも女性の方が高くなっている。

続いて、男女とも「学校教育における男女平等教育の推進」（女性 21.6%、男性 25.6%）となっている。

以下、女性では「条例や制度の面で見直しを行ない、女性差別につながるものを改める」(18.5%)、男性では「女性の人権を守るための相談、保護機関の整備、充実」(20.3%) が続いている。